

# 手と手と手

岡山発 国際貢献

学園紛争ただ中の一九六九年、岡山大学の医学生だった菅波茂五は、紛争のあおりで学校が封鎖されたのを機に、アジア歴訪の旅に出た。

それは十月で十二カ国に及んだ。「日本にない多様性の活気を感じた」。かわりをもちたいと思うようになって。その後も内科医として、医療チームに入って、アジア各国を訪ねるなどしながら、西日本の医学生ネットワークをつくり、七九年のカンボジア難民流出に際しては、菅波ら三人がそのキャンプがあったタイへ入った。

ところが、手伝いを申し出て、断られた。ただの押し掛けでは、事故が起きても責任が取れないのだ。「善意だけでは何もできない」と菅波は悟った。将来アジアの医師で団結しなければとも感じ、

## 国際舞台

全国の医学生や留学生と八〇年に、今も存続するAMS A (アジア医学生連絡協議会) を組織。四年後、その友人関係を基本に、多国籍による医療支援活動を目的として設立したが、アジア医師連絡協議会を意味するAMDA (本部・岡山市榎津) だ。

### 緊急支援

本部は当初から、今と同じく菅波が経営する医院の中に置いたが、部屋を仕切り、机一つがあるだけ。専従の事務職員もおらず、数人の医師がすべてをこなすという状態から始めた。

AMDA初の本格的な緊急医療支援は九二年。バングラデシュでの難民救援だった。設立から八年。そこから被災者救援の実績を積み。

AMDAが最も知名度を上げたのは九五年の阪神大震

災。隣県ということもあって岡山県民挙げてのボランティア熱が起き、それにも後押しされて、AMDAは医療支援活動に奔走。存在を広く印象づけた。

その年の五月には、ロシアのサハリン地震、翌年二月の中国雲南省地震など国際舞台での活動も常態化し、国内屈指のNGO (非政府組織) となった。既述

のように現在は、緊急医療支援のみならず、インドネシア・バンタアチエで展開しているような災害復興支援など長期プロジェクトも展開、その現場はアジアばかりでなく、アフリカ、中南米十五カ国に及ぶ。

AMDAの本部職員は現在、五十人。本部に常時いるのは、二十人ほどで、他に十人前後が海外事業に飛ぶ。海外派遣だけのための職員も二十人いる。活動、組織とも順調な拡大をたどってはいるが、比例して経費もかさみ、台所事情は苦しい。

### 財政規模

二〇〇四年度の決算では、総収入四億八千万円。欧米に比べ、財政規模の小さい日本のNGOにあっては、相当高レベルだが、収入の出身となると寄付金や

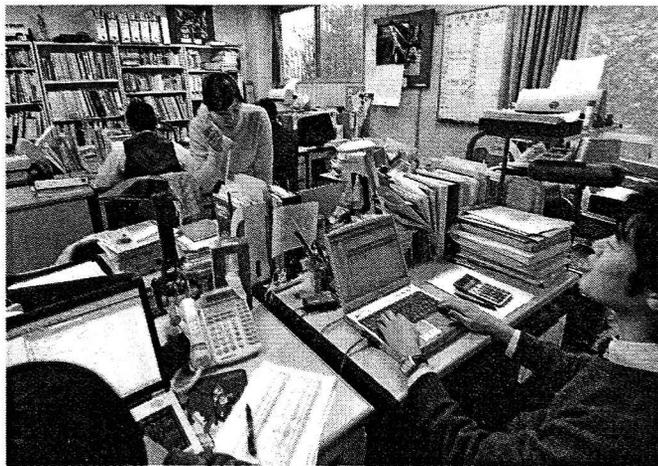
自治体などからの補助金、あるいは国際機関などと連携しての業務委託費がめばしいところだ。とりわけ〇四年度は、スマトラ沖地震が関心を集め、寄付金が一億七千四百八十万円と、前年度を五千万円上回った。

だが、寄付金というのは実に不安定で、「災害の規模や回数に左右され、毎年どの程度集まるか分からない」。職員の一人は不安を隠さない。

緊急救援は、いつ開始になるかまるで予測が付かず、募金が集まるまでにタイムラグがある。「とりあえず代表のポケットマネーで」というケースもつきものなのだ。「困っている人がいればどこへでも」を信条としている以上、資金不足を理由にやめるわけにはいかない。

菅波は、初動のための基金積み立てなど対策に知恵を絞り続けなければならぬ。(敬称略)

# 活動拡大、かさむ経費



緊急救援や海外事業を担うAMDA本部。緊急時には、被災地とをつなぐ拠点となる＝岡山市榎津